

カフカの『流刑地にて』（２）

—「書くこと」の否定—

佐々木 博康

Kafka's *In der Strafkolonie* (2)
—Die Negation des 'Schreibens'—

SASAKI, Hiroyasu

大分大学教育学部研究紀要 第40巻第1号

2018年9月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 40, No. 1, September 2018

OITA, JAPAN

カフカの『流刑地にて』(2)

—「書くこと」の否定—

佐々木 博 康*

【要 旨】 物語の焦点となっているのは、ヨーロッパ出身の旅行者が流刑地の残酷な処刑機械と非人道的な裁判手続きを前にしてどのような態度を取るかである。旅行者は士官に、現在の裁判制度を改革し処刑機械を廃止しようとしている新司令官に対抗するため協力してほしいと頼まれる。そのとき、それまで自分の考えを表明することをためらっていた旅行者は、自分はこの裁判制度に反対なのだとして士官に明言する。この旅行者の態度表明は、自己処刑としての「書くこと」を切り捨て、一人の社会的存在——その範例となるのが新司令官である——として生きていこうとするカフカの決断を示すものである。

【キーワード】 態度表明 権力の三角形 不安

5. 旅行者の態度表明

物語では二つの体制が対立している。裁判制度と処刑機械を作り上げた旧司令官が支配していたかつての体制と、処刑機械の維持に関わる予算を削減し、裁判制度を改革しようとしている新司令官の体制である。物語の焦点となっているのは、第三者である旅行者が、自身のヨーロッパ的価値観に照らして明らかに残酷きわまる処刑機械と、非人道的な裁判制度を前にして、どのように行動するかである。旅行者は視点人物となっているので、読者もまた旅行者と同じようにどうしたらいいのかを考えながら読み進んでいくことになる。旅行者の心の動きを追ってみよう。

旅行者が処刑機械と処刑過程について直接の感想をもらすことはない。しかしその残酷さにショックを受けているのは明らかである。たとえば、士官が、針を突き刺されることで被処刑者の体から流れる血がどのように排水管へと導かれるのかを喜々として説明する場面がある。士官が排水管から出てくる血を両手で受け止めるしぐさをしたとき、旅行者は「顔を上げ、手で後ろをさぐりながら、自分のひじ掛け椅子に戻ろう」とする。旅行者はあまりの残酷さにたじろいでいることがわかる。旅行者はまた、裁判制度にも大いに疑問を抱く。囚人に釈明の機会が一切与えられなかったこと、どのような判決が下され、どのような刑が執行されるかについてまったく知らされないままであることを聞いて驚く。ただ、流刑地という特殊な環境なの

平成 30 年 5 月 25 日受理

* ささき・ひろやす 大分大学教育学部言語教育講座 (ドイツ文学)

で軍法会議のようなところがあるのだろうと推測して自分を納得させる。同時に、新司令官が新しい手続きを導入してくれることを期待する。いよいよ死刑執行が開始される。機械のベッドに横たえられた囚人がまだ拘束されていない左手を旅行者の方に伸ばしてくる。旅行者が助けを求められているように感じたのは明らかである。旅行者は熟考する。本来、外部の人間は現地の事柄に介入することを差し控えるべきだ、しかし、「裁判手続きの不正義と処刑の非人間性には疑問の余地がない」のでどうしても口をさしはさみたくなる、それに処刑に招待されたのは、新司令官が自分の判断を求めたからではないのか。そのようなことを考えていると、士官が、新司令官がこの裁判制度の廃止を強く望んでいることを教えてくれる。旅行者は、自分が特別なことをしなくてもうまくいきそうだとほっとする。ところが士官は、裁判制度の維持のために自分に協力してくれるよう強く求めてくる。旅行者は自分が客観的立場にあることを強調して断るが、ささやかな手助けで十分なだと士官はさらに迫ってくる。ここに至って旅行者はようやく自分の考えを明言する。

旅行者がすべき返事は、最初からはっきり (zweifellos) していた。自分はこれまでの人生で非常に多くのことを経験してきており、ここで動揺することはありえない。自分は根っから誠実であり、恐れたりしない。(……) 結局、自分の言わねばならないことを言った。「できません。(……) 私はこの裁判手続きには反対なのです」と旅行者は言った。(235)

旅行者のこの決然たる態度表明、これこそがこの物語の核心部分である。この態度表明にはどのような意味があるのだろうか。

旅行者の裁定は、カフカにとって二つの世界の間での決断を意味している。一方には旧司令官、士官、囚人がいる。それは不条理な権力の原理が支配する世界である。子供のカフカにトラウマとなる傷を与えた残酷な世界だが、カフカの「書くこと」にエネルギーを供給してくれるものでもある。他方には新司令官がいる。やはり一種の権力者であることには変わりはないが、旧司令官と比べるとはるかに健全である。新司令官の世界は一人前の男として仕事での成功をめざすと同時に、結婚して家庭を築くこと、さらに他の人々との社交もそつなくこなしていくことが求められる世界である。この二つの世界の間で、旅行者は旧司令官の体制に反対を表明し、新司令官の側に立つことを宣言する。つまり、カフカは「書くこと」を否定し、社会的存在として「生きること」を選択するのである。それはカフカにとって自身の生の方向性をめぐる決断を意味している。このように、この物語で問題となっているのは一つの決断である。

ところで旅行者が態度表明を行うに至るまでの流れを振り返ると、奇妙な点に気づく。一つは旅行者が意見の表明をひたすら避けようとしているように感じられることであり、他の一つは旅行者の性格が不統一に見えることである。

まず最初の点について見てみよう。残酷な処刑機械、非人道的な裁判制度を前にしても、旅行者はなかなか行動しようとしなない。自分は外部の人間だからとか、流刑地は特殊な環境だからとか、介入しないで済ませるための自己弁明がなされる。また、新司令官に解決を委ねようとするなど、他人まかせのようなどころも見られる。ただ、これらについては読者も理解できないことはない。旅行者は前日に流刑地に来たばかりである。いきなり自身のヨーロッパ的価値観に従って現地の制度にあれこれ口を出す方がおかしいだろう。旅行者が慎重になるのも当然と思える。ところが読者は次第に旅行者に違和感を覚え始める。たとえば旅行者が士官から、

新司令官が現裁判制度の廃止を強く望んでいると聞いたときのことである。旅行者のようすは次のように語られている。

旅行者は思わず笑み (ein Lächeln) をもらしそうになるのを抑え込まねばならなかった。非常に困難だと思っていた課題はそんなにも簡単なのだ。(230)

旅行者は、新司令官に少しほのめかすだけで現裁判制度をやめさせることができると知って内心喜んでいる。「思わず笑みをもらしそうになる」という表現が気になる。旅行者が喜びすぎているように思われるのである。読者には、旅行者の慎重さと見えたものは、臆病さにすぎなかったのではないかと、現地の事柄に介入すべきではないという学者らしい倫理観も、行動しないで済ませるための単なる方便にすぎなかったのではないかとという疑念が生じてくる。

なぜ旅行者は自分の考えを表明するのを躊躇するのだろうか。あまりにもひどい裁判制度を否定するだけのことである。この当然と思われる意見表明がどうしてそれほどまでに大変なことなのだろうか。旅行者がためらうのは、カフカがためらっているからである。ではカフカはなぜためらうのだろうか。カフカも、旧体制を否定して新体制を受け入れることが正しいことだとわかっている。それが健全な生の方向であることを理解している。このことは物語の設定にも現れている。旧体制が恐ろしい処刑機械と人権無視の裁判手続きというネガティブなものとして表現されているのは、旧体制を否定しなければならないというカフカの意志が最初から存在しているからである。ところが旧体制の否定はなかなかできない。それがいかに不条理な残酷さに満ちていようと、つまり〈父—息子〉関係がいかに理不尽なものであろうとも、それはトラウマとしてカフカの心に残り続けており、それをあっさり切り捨てることはできないのである。なぜなら、それは深い傷であるばかりでなく、すでに大きな喜びの源泉ともなっているからである。被処刑者の陶醉の表情がそのことを示している。カフカはトラウマとともにずっと生きてきたのであり、そこから喜び——「書くこと」による「救済」——を得るすべを身につけることで生きてくることができたのである。それを切り捨てることは自分自身の存在の核を捨て去ることに等しいのである。

もう一つの奇妙な点、旅行者の性格に関する点について考えてみよう。旅行者の態度表明の場面をもう一度見てみよう。「自分は(……)ここで動揺することはありえない」と言われている。また、「自分は根っから誠実であり、恐れたりしない」とも言われている。この部分についてはこれまで研究者から違和感を持って受け止められてきた。ヒューマニスティックな考えは持っていても、なかなか自分の考えを表明できないインテリの典型のように見えた旅行者が、ここで突然強い人間になったように思われるからである。読者がそれまで抱いてきた旅行者の性格とはまったくそぐわない。どう理解したらいいのだろうか。

このような主人公の性格の不統一は通常のリアリズム小説なら大きな欠陥となるだろう。しかしまさにこのことが、この物語がカフカの内面のドラマであることを証している。カフカは読者のためではなく、自分のために書いている。旅行者の態度表明のときの異様に力強い言葉には、決断を下すに当たってのカフカ自身の気持ちが含まれている。優柔不断なカフカには、明確な決断を下すためには踏ん切りが必要だった。それがここでの旅行者の異様に強い言葉となっていると考えられる。旅行者は士官の協力依頼に対して、ただ「できません」とことわるのではない。「自分はこれまでの人生で非常に多くのことを経験してきており、ここで動揺する

ことはありえない。自分は根っから誠実であり、恐れたりしない」と、自分の性格をことさらに確認している。なぜこのような性格確認が必要なのか。それはカフカが本来そのような性格ではないからである。旅行者の断定は、カフカの自分に対する必死の言い聞かせと理解するべきである。「ここで動揺することはありえない」は、「ここで動揺してはいけない」であり、「自分は根っから誠実であり、恐れたりしない」は、「誠実に、恐れずに決断しなければならない」に他ならないのである。

カフカはこの物語で大きな決断をする。自分の内部にある旧体制を葬り、トラウマから離脱しようとする。研究者は旅行者の優柔不断さ、ひ弱なヒューマニズムを批判し、また態度表明のときの驕りに似た自己評価に性格の不統一を見るのであるが、自分のためにこの物語を書いているカフカにとってはそんなことは問題ではない。旅行者に———ということはつまり自分自身に———、「できません。(……) 私はこの裁判手続きには反対なのです」と語るために、カフカはこの物語を書いたのである。

6. 士官の死

旅行者の態度表明を機に物語は急展開する。旅行者の言葉を聞いた士官は、囚人に代わって自ら処刑機械にかかる。機械に横たわるに当たって士官が自分自身に選ぶ判決文は、「公正であれ (sei gerecht)」というものである。士官が処刑機械にかかるのは、囚人の場合とは異なり、何らかの罪を犯したからではない。旅行者の協力が得られないことがはっきりし、現裁判制度や機械の維持が不可能になったことを悟ったからである。つまり、士官は自分の愛する機械にかかって死にたいと思ったのであり、「公正であれ」という文も、不正行為に対する罰のゆえにではなく、自らの死に際して自身の体に刻み込みたい言葉として選んだにすぎないだろう。ではなぜこの文なのだろうか。

旧体制を支配していたのは「上官を敬え」という権力の絶対性の原則だった。旧司令官を敬愛し、この原則に従ってこれまで生きてきた士官であれば、死に際しても「上官を敬え」という言葉を自らに刻みつけたいと考えるように思われる。しかし、士官はそうしなかった。そうせずに「公正であれ」という判決文を選んだということは、権力を絶対として生きてきた彼の中に、それとは別の要素である「公正さ」への強い傾向も潜んでいたことを示している。つまり、士官はこれまで表明することはなかったが、心の奥底では「上官を敬え」よりも「公正であれ」の方を本来より尊重されるべき指針と感じていたのである。そのような矛盾を自身の内部に抱えていたのである。士官は旧司令官を尊敬し、彼の定めた原則「上官を敬え」に従って生きてきた。この原則に違反した者は容赦なく死刑にしてきた。しかし、彼が本来信奉する原則は「公正であれ」なのである。それゆえ、死に際してそれを自分の体に刻みつけようとするのである。

処刑機械に横たわるに際して、士官は軍服を脱ぐ。物語の初めで、旅行者が「そういった軍服は熱帯ではつらいでしょう」と言ったのに対して、士官は「でも軍服は故郷を意味するのです。我々は故郷を失いたくありません」(204)と述べていた。軍服は権力的ヒエラルヒーを具体的な形として示すものである。権力の原理に従って生きる者にとっては本質的な支えとなるものである。しかし、処刑機械にかかるに当たって士官はそれを脱ぐ。軍服を脱ぐ士官のようすは次のように語られている。

軍服の上着を脱いですっかり裸になるまでは明らかにせかせかしていたのに、服を一枚一枚扱うときは非常にていねいだった。軍服の銀モールを指でわざわざそろえ、房飾りをゆすつてきれいに整えた。とはいえ、きちんと整え終わるやいなや、突然不機嫌になって、一枚ずつさっさと穴の中に投げ込んだのは、このていねいさとはほとんどそぐわなかった。最後に残ったのは、革ひものついた短剣だった。彼は鞘から剣を引き抜き、それを折り、それから折れた短剣、鞘、革ひものを一緒にたにつかむと、荒々しく投げ捨てた。穴(Grube)の下でそれらが互いにぶつかってガチャガチャと音を立てた。(240)

士官は、軍服を非常にていねいに扱うにもかかわらず、荒々しく投げ捨ててしまう。この捨て方を見ると、士官は本当は軍服や剣が好きではなかったのではないかと思えてくる。ここには士官の二重性が見られる。権力の原理を絶対とする部分と、それに激しく反発する部分である。軍服が権力の世界での位階を表すとすれば、剣は権力をめぐる戦いに必要なものである²⁾。両者は「上官を敬え」が絶対とされる世界で不可欠のものである。軍服を脱いで剣を投げ捨てる士官は、そのような世界から離脱する。そして裸の体に「公正であれ」という、人間としての士官が本来もっともよりどころとする言葉を刻みつけようとするのである。

すでに見たように、子供時代のカフカは自分が理解できない「法」によって支配された世界において、ひたすら「上官を敬え」という権力の原理をその身に刻み込まれてきた。しかし、子供のカフカの心の片隅にあったのは、権力の原理と相反する公正さの原理である。このような矛盾を抱えて生きてきたのが子供時代のカフカである。この矛盾こそが子供のカフカに与えた傷なのである。権力の原理を当然のものとして受け入れていれば、それは傷とはならなかっただろう。公正さの原理を心の中に持っていたからこそ、権力の原理がカフカの傷となったのである。

そしてカフカの文学がテーマとしているのも、権力の原理と公正さの原理の衝突である。ただカフカがさまざまな作品で描くのは、正義を支えに権力に抵抗し、それを打ち負かしていく英雄的な主人公ではない。権力に圧倒されて破滅していく人物(『判決』のゲオルク)、家族間の権力関係の中で見捨てられていく人物(『変身』のグレゴール)、権力の原理が優先され公正さを抑制させられる人物(『火夫』のカール・ロスマン)、人を踏み台にしても権力の階段を上げていこうとする人物(『訴訟』のヨーゼフ・K)である。そのような逆説的な形で権力の問題性をあぶり出すのである。それらはカフカの「傷」が顕在化されたものであるが、同時に「公正であれ」という原則を間接的な形でほめかすものでもある。

士官は愛する処刑機械の中に入り、「公正であれ」という文を自分の体に刻み込もうとするが、機械の崩壊によって無残な死を遂げる。士官の死のようすは旅行者の目を通じて、次のように語られている。

そのとき彼(=旅行者)は、そうするつもりはほとんどなかったのに、死体の顔を見ることになった。生きてきたときそのままの顔だった。約束された救済のしるしは見られなかった。機械にかけられた他のすべての者が見出したもの、士官はそれを見出さなかったのだ。唇は固く閉じられていた。両目は開いており、まるで生きているように見えた。まなざしは静かで確信に満ちていた。額には太い鉄の針(Stachel)の先端が突き刺さっていた。(245f.)

処刑機械の崩壊と士官の死は、カフカにとって自らの執筆システムの瓦解を意味している。士官が期待していた「救済」とは「書くこと」による喜びのことである。士官はそれを得ることなく死んでいく。カフカが士官の壮絶な死に、「書く自己」としての自分自身を見ているのは間違いない。死んだ士官の「まなざしは静かで確信に満ちていた」という表現は肯定的なものだが、ここにはカフカの、本来はそのように生き、そのように死にたいという強い願望が投影されている。

しかし、士官ばかりでなく、旅行者もカフカの分身であることを思い出そう。執筆機械の崩壊と士官の死をもたらしたのは旅行者の態度表明である。カフカはこの物語で「書くこと」に執着する自分を自ら葬っている。士官の壮絶な死は読者の心を揺さぶるが、物語の焦点はあくまで旅行者の決断にある。そして旅行者の決断は、カフカの生きようとする意志が実行させたものにほかならない。

7. 旅行者の変貌

自分自身の態度を明らかにするまでの旅行者は冷静な第三者であり、行動を躊躇する間だった。ところが、態度表明以後の旅行者は性格が変わったようになる。態度表明のさいの、「動揺することはありえない」人間、「根っから誠実であり、恐れたりしない」人間という自己認識どおりの人間になったかのように、強くなり決然とふるまうようになる。

旅行者は、士官が自ら処刑機械にかかろうとしているのにそれを止めることをしない。それどころか、「今士官がしようとしていることは完全に正しいだろう。自分が彼の立場なら同じことをしただろう」(241)とさえ考える。敗者は世界から退場していくのが当然と言わんばかりの見方である。

また、囚人や兵士に対しても態度が変わる。

「帰りなさい」と彼は言った。(……)彼(＝囚人)は両手を組み合わせて、ここに居させてくれと懇願した。旅行者が首を横に振って譲歩しようとしないと見ると、ひざまずきさえした。ここでは命令というものは何の役にも立たないのだとわかった旅行者は、二人に近づいて追い払おうとした。(243)

旅行者は囚人たちが命令に従わないことがわかるとすぐに行動に出る。外部の人間である自分には二人に命令を下す資格があるだろうかなどと心配したり、そもそも命令したとして二人は自分の言うことに従ってくれるだろうかなどと弱気になったりするそぶりは微塵もない。死んだ士官を処刑機械から引きずり出すのを手伝おうとしない囚人と兵士に対してはもっと強い態度に出る。

旅行者は彼らのところまで行って、カづくで (mit Gewalt) 士官の頭のところに引っぱって来なければならなかった。(245)

その後、町に向かうときは、旅行者は「兵士と囚人を従えて (hinter sich)」行くし、茶店に

は、「二人の同伴者を引き連れて (gefolgt von seinen Begleitern)」入っていく。まるで二人が自分の部下でもあるかのようである。ここに見られるのはカフカの他の作品にもしばしば登場する「権力の三角形」³⁾である。旅行者は権力の三角形の中心で命令する人間になっている。権力的ヒエラルヒーを当然とし、他者を動かして生きることのできる人間となっている。

このように、態度表明によって旧体制を否定し士官の死を見届けた旅行者は、そのときから外部の観察者や裁定者ではなく、自ら流刑地で生きる人間となる。自ら生きる人間とは、世界が権力の原理によって動いていることを認め、そのような世界で自身も権力を行使して生き抜いていこうとする強さを持った人間のことである。それが社会的存在としての人間であり、そのような生き方の理想像が新司令官のようなポジティブな権力者である。「書く自己」として死んだカフカは、いわば社会的自己として復活する。

8. 旧司令官復活の予言

物語は処刑機械の崩壊と士官の死では終わっていない。アスタリスクが付された一行があって、さらに数ページが続く。旅行者は囚人や兵士とともに茶店を訪れ、たまたまその奥に旧司令官の墓があることを知る。墓石に刻まれた前司令官の復活の予言を読んだ旅行者はただちに港に向かい、急いで島を離れる。

旅行者があわてて島を去るのは、旧体制の再来を恐れたからである。茶店にいる、港湾施設の建設に従事する労働者たちは旧司令官復活の予言など信じていない。彼らは予言をせせら笑い、旅行者にも同調を求める。ところが、旅行者はそれに同調できない。それは彼の中に、ひょっとしたら予言が実現するのではないかという不安があるからである。

この不安とは何だろうか。旧司令官が復活すれば、処刑機械が修理され、士官による囚人の処刑も復活する。つまり、カフカは「書くこと」という自己処刑に舞い戻ることになる。〈父一息子〉関係のトラウマの再来である。カフカは旅行者の態度表明を通じて、いったん過去を断ち切った。新司令官のようなポジティブなロールモデルを目標として生きることを決心した。ところが、断ち切ったはずの過去が断ち切れていないのではないかという不安を拭いきれないのである。

不安に駆られたカフカの最終的な結論は、逃げるというものである。旅行者は新司令官に会うこともない。追いつがる囚人と兵士を振り捨て、島に来たときと同じく一人になって去っていく。権力の三角形はくずれる。態度表明以後、力強く生き始めていた旅行者は、再び状況に関わろうとしない外部者、社会的現実を生きていこうとしない人間に戻っている。旧司令官が本当に復活するのか、それとも新司令官が全面的に島を掌握することになるのかはあいまいなままに残される。流刑地はカフカの心の中であり、そこでどのような体制が支配するかは、カフカがどのような生き方を選ぶのかと連動している。島の体制が不確かになったということは、カフカが再び生の二つの方向の間で揺らぎ始めたことを示している。

カフカは『流刑地』のこの末尾の部分に満足していなかった。それを「こしらえもの (Machwerk)」と呼び、何度も書き直しを試みた。しかし、結局うまくいかず、最終的には若干のカットだけで出版することになった。最後の数ページがカフカの思うようにいかなかったのも当然である。すべてはカフカの内面の反映なのであり、心が再び揺れ始めた以上、ほかの末尾は書き得なかったのである。

9. 伝記的側面

「はじめに」で、フェリーツェのために生まれた「憂慮」がこの物語の成立に関連していると書いた。フェリーツェとの破綻はこの物語とどう関わっているのだろうか。また、『流刑地』でカフカはなぜ上で述べたような決断を迫られることになったのだろうか。物語の伝記的背景を見ていく。

カフカはフェリーツェと婚約したが、結婚によっても「書くこと」は可能であると考えていた。それでも結婚が近づくにつれ、「書くこと」が脅かされるのではないかという不安が強くなっていく。これまでの職業生活に加えて、結婚生活、結婚にともなう社交生活の領分が大きくなっていくからである。カフカはフェリーツェへの手紙では結婚に否定的なことをほのめかすことはないが、グレーテに宛てては結婚に対する強い疑いを繰り返した。カフカのあまりにも暗い手紙を読んだグレーテは、二人の結婚がうまくいかないのではないかと心配になり、友人としての義務感からフェリーツェにカフカの手紙を見せた。こうしてホテル、アスカーニッシャー・ホーフがカフカを糾弾する「法廷」となる。フェリーツェは釈明を求めるが、カフカはほとんど沈黙したままだった。

アスカーニッシャー・ホーフをもたらししたのは何だったのだろうか。それは「書くこと」と「生きること」についての、カフカとフェリーツェの根本的な捉え方の違いと関わっている。フェリーツェにとっては、まず「生きること」がある。働き、結婚生活を営み、人々と交わる生活である。その上にたとえば自分の生活を満たすものとして趣味がくる。ところがカフカの場合は違う。「書くこと」は、「それだけが僕に生きる権利を与える僕の仕事」と言われているように、カフカにとって存在の核心なのである。それが満たされて初めて、職業生活、結婚生活、社交などを容れる余地が生まれる。婚約以前もカフカは、労働者災害保険局での仕事のために「書くこと」ができないことを頻繁に嘆いている。「書くこと」が自分の存在の意味であり、それにすべてのエネルギーを注ぎたいと思っているカフカにとって、職業生活はそれを邪魔するものでしかない。職業生活に加えて結婚生活、社交となると、途方もない負担に思えてくるのである。このような認識の違いが二人のすれ違いとなった。フェリーツェは、カフカの作家的部分は、結婚し二人で社会生活を営むようになれば自然に薄れていく、自分にとってのダンスなどと同じ趣味程度のものだと考えていた⁴⁾。ところが、カフカにとっては「生きること」の方がなくてもいいものだったのである。もちろんフェリーツェの捉えの方が一般的で、カフカの考え方が特殊である。そのような考え方をするカフカが、「書くこと」を確保しつつ、「生きること」も望んだことが、アスカーニッシャー・ホーフでの決裂に至った最大の原因と言えるだろう。

フェリーツェと婚約を解消してから一ヶ月後、カフカは第二の長編『訴訟』の執筆を開始する。フェリーツェとの破綻によって、カフカが望んでいた、「書くこと」だけに没頭する生活が可能になる。最初は順調だったが、やがて書けなくなっていく。打開しようと一週間の休暇を取るが成果は得られず、休暇をさらに一週間延長する。それでも『訴訟』はまったく進展しなかった。

二週間の休暇の終わり頃、カフカは絶望に沈み、自殺を空想するまでになる。10月15日の日記には、「僕がそもそも生き続けられだが、それはまったくはっきりしていない⁵⁾」とか、「昨

夜午前三時頃にベッドに入ったときに考えたこと（自殺、プロートに宛ててあれこれ依頼する手紙）⁶⁾などの言葉が見られる。「プロートに宛ててあれこれ依頼する手紙」というのは、自分の死後の始末のことである。カフカの自殺念慮の原因はもちろん、「書くこと」の挫折である。同じ日記の後段には、「夜中の二時半、ほとんど何も……回読んだがひどいことがわかった。二重に……失敗した。僕の前にあるのは事務所と……崩壊しつつある工場の……。僕はしかし……まったく落ち着きを得られない」⁷⁾という否定的な自己評価が書かれている。「二重」の失敗とは、最初の長編『失踪者』もそれに続く『訴訟』も完成させることができなかったことを指しているだろう。同じ時期『失踪者』の結末部分とおぼしき箇所も書いており、『訴訟』が駄目なら『失踪者』だけでも完成させようと苦闘していたことがわかる。「僕の前にあるのは事務所と……崩壊しつつある工場の……」は、「書くこと」のできない自分は労働者災害保険局に通い、経営に関与しているアスベスト工場の管理をして生きていくしか能のない人間だという意味であり⁸⁾、カフカの自嘲である。自分にはもう作家としての可能性はないのだと絶望していることがわかる。

『流刑地』が成立したのはカフカがこのような精神状態にあるときだった。『訴訟』が書けないのに、この物語は短時日のうちに一気に完成している。『訴訟』とこの物語はどのような関係にあるのだろうか。両作品の構図を簡単に見てみよう。

『訴訟』の主人公ヨーゼフ・Kは、ある朝突然逮捕される。罪が何なのかは知らされない。無罪を勝ち取るために奔走するが、何の成果も得られず、最後は処刑されてしまう。物語の視点人物となっているのは処刑されるヨーゼフ・Kである。そしてヨーゼフ・Kはカフカの分身である。つまり、一言で言えば、『訴訟』は、カフカが裁判組織を通じて自分自身を処刑する話なのである。その意味では、『判決』におけるカフカの自己処刑——父親による息子の処刑——と同じである。

『流刑地』の囚人もヨーゼフ・Kと同じく、罪が何であるか、自分に下された判決が何であるかを知らされることなく、処刑されることになっている。『訴訟』における裁判組織とヨーゼフ・Kの関係が、ここでは士官と囚人の関係になっていることがわかる。つまり、士官による囚人の処刑は、『訴訟』という物語全体におけるカフカの自己処刑を簡略化したものとなっているのである。ただ『訴訟』とは異なり、『流刑地』には処刑する側と処刑される側の両者を眺める第三者——つまり旅行者——が登場している。そして視点人物となっているのは処刑される囚人ではなく、この第三者である。『流刑地』は『訴訟』の構図そのものを俎上に載せ、第三者の目で吟味し、評価するものとなっているのである。

このように『流刑地』は、『訴訟』におけるカフカの自己処刑＝「書くこと」自体をテーマ化している。カフカは、旅行者という、本来の自分とは異なる、どちらかというフェリーツェに近い健全な良識人を導入し、あえてそちら側に身を置くことで、「書くこと」に執着する自分がどのように見えるのかを客観的に捉えようとしている。そしてこの視点からは、ペンは異常増殖した処刑機械となり、憑かれたように書き続けるカフカは、機械にフェティッシュな執着を示す異様な士官となる。「書くこと」は歪んだ自己処刑となる。

『訴訟』から『流刑地』の間に、大きな転換が起こっているのは明らかである。『訴訟』が行きづまる中で、カフカの中に、自分がひたすら力を注いでいる「書くこと」そのものへの疑念が生じてきたのではないだろうか。なぜ自分は「書くこと」にこんなにも執着するのか、なぜ自分が書くのはいつも自己処刑の物語——『判決』、『変身』、『失踪者』、『訴訟』の主人公はみ

んな死ぬ——なのか、そしてこのようなことを続けていくことにどのような意味があるのかという疑問である。こうしてカフカは、「書くこと」から「生きること」へと方向を転じる。「書くこと」に挫折し、自殺を思い描くまでになっていたときに突然成立したのが『流刑地』であることを考えると、カフカの無意識が物語の形でカフカに舵を切るよう促したと言えるかもしれない。ただ、フェリーツェと婚約していたときのように、「書くこと」を一方で保持しつつ、他方で「生きること」も実現するという中途半端な形であってはならない。二者択一しかないというのがアスカーニッシャー・ホーフの教訓だからである。「生きる」ためには「書くこと」を否定しなければならない。こうして『流刑地』が苦渋に満ちた決断の物語となったのである。

むすび

カフカには自分の人生上の問題を物語の形で検討し、答えを得ようとするところがある。ではこの物語では何が問題になっているのだろうか。そしてそれに対してどのような答えが得られたのだろうか。以下にまとめてみよう。

この物語で問題となっているのは、「書くこと」に没頭する生はこのままでいいのか、そこには大きな歪みがあるのではないかということである。物語ではペンが残酷な処刑機械という否定的イメージで現れる。カフカの作家的自己は、エキセントリックでフェティッシュな歪んだ士官として登場する。そして「書くこと」が自己処刑であること、このような形の自己処刑の動因となっているのが、旧司令官で表されるネガティブな父親像であることが示唆される。カフカは、精神的暴力をふるう父親によって加えられた心の傷のために、絶えず世界を恐るべき権力的闘争の場と見てしまい、その中で生きることに苦しまざるを得ない。その苦しみを「書くこと」で自己治療しているのである。しかし、世界が権力の原理で動いているにしても、それをプラスの方向で活かす道もある。それを実行しているのが新司令官である。それはポジティブな父親像である。権力を志向しつつも、それを創造的、建設的な方向に振り向けることで生の世界を力強く生き抜いていくあり方である。袋小路に陥っている前者の生のあり方を振り捨て、後者のそれを受け入れること、それがこの物語の課題である。

この生の重大な決定を下すために導入されたのが旅行者である。旅行者は、カフカの「書く自己」が行っていることを、健全な良識人の目で見、客観的に判断しようとする裁定者である。裁定者は旧体制を全面的に否定する。それはカフカにとっては、トラウマのために拷問と処刑のような「書くこと」を延々と続けることの徹底的な否定を意味する。士官は死ぬ。同時にそれまで単なる外部的な裁定者にすぎなかった旅行者が強くなり、この世界を主体的に生きるようになる。カフカは士官という作家的自己を破滅させ、社会的自己として生き始めるのである。ただ、「書く自己」から社会的自己への移行は円滑には進まない。それを示すのが、茶店における旧司令官復活の予言である。旧体制復活への不安とはトラウマ復活への不安である。社会的存在として生きようとするとき、そこで被る権力性の傷が再び子供時代のトラウマを呼び覚まし、自己処刑としての「書くこと」へと回帰してしまうことへの不安である。結局、旅行者は逃げるように島を去っていく。カフカは、確かに一つの決断を下した。しかし、まだその方向で生きていくことへの確信がもてないのである。物語の末尾が示しているのはそのようなカフカの現状である。

初期の短編『変身』の主人公グレゴールは、社会的存在であることをやめて引きこもってし

まった。権力の強さを欠くグレゴールは死んでいくしかない。権力性は生きる力でもあり、それを否定すれば生きてはいけない、これが初期のカフカの結論である。これを受けて中期のカフカがめざすのは、社会から撤退するのではなく、肯定的な権力性を身につける方向である。新司令官をロールモデルとして生きようとする方向である。ただ、物語末尾の旅行者の遁走が示すように、カフカは不安に襲われ、いったん受け入れた新しい生き方をすぐに放棄してしまった。それでも、とりあえず決断はなされたのである。それに旧司令官復活は予言でしかないとも言える。実現するかどうかは不明のままである。決断を行ったことによってカフカは大きな一歩を踏み出した。暫定的であるかもしれないにせよ、中期のカフカはこの道を生きていく。ここでなされた心の準備が、フェリーツェとの文通の再開、そして再度の婚約へとつながっていったと言えるだろう。

注

- 1) 入江とも子は、「取ってつけたような奇妙な印象」を与えるものであり、「辻褃の合わない記述」、「違和感のある記述」としている(4頁)。入江とも子『『流刑地にて』——カフカのふたつの自我をめぐって——』九州大学文学部独文学研究室『夢宇是』創刊号、1-23頁。ベルント・アウアーオクスは、旅行者についての文、“Er war im Grunde ehrlich und hatte keine Furcht”を「全知の語り手の信頼できる声」ではなく、「旅行者の自己評価のようなもの」が表現されているとした上で、この自己評価は「欺瞞」であると述べている。Auerochs, Bernd: 3.2.5 In der Strafkolonie. In: Engel, Manfred / Auerochs, Bernd (Hg.): *Kafka Handbuch. Leben-Werk-Wirkung*. Stuttgart / Weimar 2010, S. 214. —ちなみに、インゲボルク・ヘーネルは上の文を語り手による地の文であると見なしており、ロバートソンもそう考えているが、アウアーオクスは地の文ではなく、旅行者の内面の声が見されたものと考えている。筆者も同意見である。従って、日本語にする場合は、「彼は根っから誠実であり、恐れを知らなかった」ではなく、体験話法として、「自分は根っから誠実であり、恐れたりしない」とするのが適当である。Auerochs, a. a. O., S. 214. Henel, a. a. O., S. 484. Robertson, a. a. O., S. 207.
- 2) 軍服や剣はカフカの他の作品でも記号的意味を担っている。『変身』のザムザ家の居間にはグレゴールの軍服姿の写真が飾られている。また軍服ではないが、外で働き出した父親が制服を好んでいることも強調される。『失踪者』ではアメリカの自由の女神像がたいまつではなく、剣を掲げていることになっている。これは主人公がこれから生きることになるアメリカという希望に満ちた世界もまた、権力闘争の世界であることを暗示している。このように、軍服や制服および剣は、権力性を喩えるものとなっている。
- 3) カフカの作品にはしばしば、中央の人物が力を持ち、他の二人がその指示に従う三人組が登場する。この小さな権力組織をここでは「権力の三角形」と呼んでいる。『変身』の三人の下宿人や『訴訟』でヨーゼフ・Kの逮捕を告げに来る監督と二人の番人など、例は多い。
- 4) たとえば、エルンスト・パーヴェルは次のように書いている。「カフカの母親と同じく、彼女(=フェリーツェ)も時とともに、自分の熱烈な崇拜者(=カフカ)が、愛する妻と平和な家庭ときちんとした食事によって、すぐ夢想的な傾向を脱して、自分の職業に打ち込み、ただ趣味としてのみ書くことに携わるようになるだろうと確信するようになった。」Pawel, Ernst: *Das Leben Franz Kafkas. Eine Biographie*. Aus dem Amerikanischen von Michael Müller, Reinbek bei Hamburg 1990, S. 321.
- 5) Kafka: *Tagebücher*, a. a. O., S. 678.
- 6) Ebd., S. 679.
- 7) Ebd., S. 680. 点線部は、日記を書いていたノートが破れていて読み取れない箇所。

- 8) 休暇を取ったにもかかわらずほとんど何も書けずに終わった三日間の後で、カフカは日記に、「この三日間で早くも、僕が事務所に行かずに生きられる人間ではないと結論づけられることになるのだろうか？」(1914年10月7日)と書いている。Kafka: *Tagebücher*, a. a. O., S. 678.

Kafkas *In der Strafkolonie* (2)

— Die Negation des 'Schreibens' —

SASAKI, Hiroyasu

Abstract

Kafkas Kontrastfigur zum Vater und dessen erzählerischem Alter ego ist der neue Kommandant, der, aufgeklärt und pragmatisch, für eine Reform des Gerichtswesens steht. Um der Entfernung des Hinrichtungsapparates respektive der Beendigung von Kafkas Schriftstellerdasein Einhalt zu gebieten, bemüht sich der Offizier - Kafka in der Rolle des Schriftstellers - um Unterstützung beim Forschungsreisenden, seines Zeichens neutraler Beobachter. Dessen justizkritische Stellungnahme ist aber eindeutig und so zu verstehen, dass Kafka dem mit einer Selbsthinrichtung gleichgesetzten Schreibvorgang abschwört und sich als soziales Wesen neu erfindet.

【Key words】 Stellungnahme, Machtdreieck, Angst